

## 海外だより

## 外国語ができないで外国を 旅行する話

吉村 仁 ローマにて



ひとりぼっちで海外旅行に出かけるのは大変だ、と人からもいわれ、自分でもそう思いながらも、「まあ、案ずるより生むが易かるう」などと楽観主義的信条に組みして、とにかく1人で27日間の海外出張にかけた。

用務は、ヘルシンキで行なわれる国際社会保障協会(ISSA)主催の船員社会保障会議への出席と、ラスパルマス(スペイン領)の日本船員福祉会館の視察そのほか。尊敬する先輩のご教示に従って、駄足旅行でもよいから欲張ってなるべく多くの都市を見よう(見聞しようというのではない)との魂胆で、訪れる都市は、カイロ、アテネ、ローマ、ラスパルマス、マ

ドリッド、パリ、ウィーン、ハンブルグ、ヘルシンキ、コペンハーゲン、と割に多い。正直に懸値のないところで、私は、語学で達者なのは日本語だけ、外国語は幼児の域にも達していない。そこで最少限旅行に必要と思われる会話(空港、ホテル、食事などに関する会話)を必死で詰めこむと同時に口が駄目なら筆談をするまでとメモ用紙をポケットにしのばせた。まあ、旅行中は、こみいったことはいわない(実はいえない)ことにして、必要最少限の用は足りたように思う。しかし、これは訪れた国が英語使用国でなかったせいかもしれない。

ヘルシンキの会議では、遺憾ながら、この方式では駄目なので、着いた日からホテルで会議資料を大声をあげて読む、メモを作るなど、にわか勉強に大童。お蔭で会議の様子はほぼ理解することはできたように思う。その代り、芯が疲れたことおびただしい。さらに、困ったのがレセプション。黙って酒だけ飲んでいるわけにゆかず、少なくとも話しかけてくる相手とはしゃべらざるを得ない。なにしろよくききとれない英文を和訳し、和文をあやしげな英文に変えるという思考と作業の過程を繰返すのだから、全く疲れる。4日間の会議が終ったときは、外国語のため、全く疲労困憊もいいところ、といったていたらく。

しかし、まごついたり、聞き違えたり、1人合点をしたりで、失敗したこともあったが、それ程国威を失墜したとは思えないで、旅行をしているのだから不思議だ。また、一人で苦勞したお蔭で、旅行の仕方についての知慧も少しはついたように思う。したがって、私のように外国語のできない方(私のようなのも珍しいと思うが)で、海外旅行を1人で

しなければならない破目に陥った方には懇切丁寧に、詳細にわたって、かつ無料で、お話しあげたいと思う。「旅は道づれ、世は情」というのに、道づれがないのだから。

しかし、どう考えても、外国語はできないよりもできた方がよいということだけは、間違いない——というのが私の結論である。

(社会保険庁)

## 社会保障こぼれ話

### 社会保障の推進

——ユーゴスラヴィア——

ユーゴスラヴィアは、1929年に王国となり。その後、1945年に連邦人民共和国という形になっている。この国には、王国と改称される以前つまり、1922年に年金保険、疾病保険および労働災害保険が、すでに採用され、さらに、1927年には、失業給付の制度が設けられていた。もっとも、これらのうち、年金保険は1937年から実施されている。

以上に示されるように、この国の社会保険制度は、いずれも、被用者を対象として、第1次世界大戦以後の短期間に、急いで採用されている。このように急速に社会保険が実現されてきた背景には、その当時きわめて激しかった労働運動が指摘される。第1次大戦以後、各国で急速に労働運動が発達し、しかも激しい労働運動が展開されており、この国もまた例外ではなか

った。この国でも、労働運動の要求の中に社会保険の採用が含まれていたが、社会不安を緩和する一つ的手段として、社会保険の実現が不可欠となり前述したように、いくつかの社会保険が実現されてきた。

しかも、1928年以後、労働組合は優勢な立場を利用して、従来の法律を改廃し、また、前にも述べたように、1937年には法律が死文化していた老齢年金制度を実施させている。第2次大戦まで、社会保険は除々に発達してきたが、1945年に共和国となってからは、新しい経済・社会体制のもとで、社会保険の発達はすっかり面目を一新している。

いずれにしても、この国では、社会保険の採用と発達に、労働運動の果たした役割がきわめて大きく評価されている。

これは、社会保障の推進力として、労働運動が強調されている一例といえる。

(平石長久 社会保障研究所)